

# 実践総合農学会 ニュースレター

## 第8号

### ごあいさつ－2014年の新年を迎えて

実践総合農学会会長 三輪春太郎



あけましておめでとうございます。

昨年は政権が安定し、デフレ脱却の金融政策が打ち出され、経済にも明るさが見えるなかで、農業についても成長戦略に基づき、年末に『現場の宝』をみがき、活力ある農林水産業の実現を目指して攻めの農林水産業推進本部とりまとめ（重点事項）一」がとりまとめられた。

このとりまとめには、経営所得安定対策の見直し、農地の集積、六次産業化の推進など日本農業活性化に必要と思われることがすべて盛り込まれており、頼もしい限りであるが、今後は多くのリスクを内包する政策の推進に対する政府の意思が試されるとともに、農業界の熱意と力も同時に試されることになる。

農業の力の発揮に農学はどう貢献できるか、新年度も気持ちを引き締めて皆様と実践総合農学に取り組んでいきたい。

2013年7月27日に総会・理事会を開催し、あわせて、シンポジウム「TPP 何を守るべきか、何が守られるのか」を開催した。おりから、我が国が正式に参加したはじめての会合とあわせたようなタイミングであり、農林中金総合研究所特別理事 蔦谷栄一氏を座長とし、農林水産省農林水産政策研究所前所長 武本俊彦氏による「WTO・FTA の進展における食料・農業・農村政策のあり方」と日本農業研究所研究員 服部信司氏による「TPP 交渉の枠組みと日本の対応」の二つのすぐれた講演で、「経済協定の名をかかげた親米外交対策」、「WTOと同じ面、異なる面」などこれまで唐突に現れ、消えたと思えば出てきた政府のTP推進の本質がリアルにあぶり出された。

二人の農業経営者、面川義明氏（宮城県角田市）、井尻弘氏（生産者連合デコポン取締役）

による現場からのメッセージを得た上で、東京農業大学 門間敏幸教授による関税撤廃の農家・農業経営に及ぼす影響の具体的な評価事例が提供された。

このシンポジウムが開催されたあと、昨年未までの大筋合意が期待されていたようであるが、秋以降、いろいろな局面でオバマ政権の指導力低下が目立つようになり、そのせいか現時点ではアメリカとほかの国との対立点に関する歩み寄りも進まず、合意への道筋は混沌としているようだ。

2013年11月23、24日には第8回地方大会が愛媛県西条市との共催で開催された。本学会の地方大会は年々盛んになってきており、昨年の西条大会では西条市の熱意も強く、盛会という点では記念すべき地方大会であった。

全体を統括された板垣先生とシンポジウムの座長を務められた両角先生、舘先生からいただいた感想文でその充実ぶりがわかるであろう。

また、7月の理事会には特に学会創設時の東京農大大学長であった進士五十八顧問にご出席をお願いし、機関誌「食農と環境」をはじめとする当学会独自のカラーづくりに込めた思いを述べてもらった。一言でいえば、東京農業大学の「農業の総合大学」としての学校経営と一体的に働く学会を作りたかったという狙いで、「初心、忘るべからず」、良いお話を聞いたと思っている。

これまで理事会での強いご意見もあり、会員の拡大に力を入れてきたが、今年度も先生方のご協力を得て多くの新しい会員のご入会をいただいた。特に学生会員については、短期大学部から多くの入会があり、感激している。

西条大会に参加した学生会員からはフレッシュな感想をいただいた。これからも実践総合農学会の活動に参加し、世界、日本、農業、食料、環境、地域といったもろもろに思いを馳せることによって、知識人として大きく成長していただきたい。

## 西条大会を振り返って

実践総合農学会事務局長 板垣啓四郎

実践総合農学会の事務局長を門間教授から引き継いで、今年で4年目になりました。私が引き継いで以降これまでに、7月のシンポジウムでは、東日本大震災による農業・農村の被害からの復興やTPPと日本農業の対応といったテーマを掲げ、また11月の地方大会では、「中山間地域における6次産業化の取り組み」（福島県鮫川村）、「都市近郊農業における食と農の交流」（愛知県安城市）、そして「産官学連携に



よる農業を主体とした新たな産地モデル化を考える」(愛媛県西条市)をシンポジウムのテーマにして、それぞれの報告者から話題を提供していただき、また活発に議論していただきました。これらシンポジウムの内容につきましては、学会誌『食農と環境』に記録したものを原稿にして印刷(最近年は印刷中もしくは編集)し、逐一会員の皆様のもとへお届けさせていただきます。

東京農業大学で開催する7月のシンポジウムにつきましてはひとまずおいて、地方大会におきましては、開催地の市町村長様をはじめとする関係者の方々から言い尽くせないほどの多くのご支援とご協力をいただきながら、企画の段階から開催に至るまで、一緒になり行っております。

地方大会のテーマ設定では、三輪会長と相談しながら、開催地にもっとも相応しく、また時代のニーズに適合したテーマづくりに努めています。そのために、開催地から有益なアドバイスをいただきながら進めております。

西条大会では、西条市が「未来都市モデルプロジェクト」実証地域のなかで農業革新都市に指定されたことを受けて、工業部門が有する技術・知識・情報・経営管理システム・販売ノウハウなどを農業部門へ効果的に移転し、農業の近代化を推し進めているという取り組み事例を西条市からご紹介いただきました。そこでこれをシンポジウムで取り上げることにしました。西条市との協議の結果、シンポジウムでは、その内容と課題を明らかにし、またプロジェクトの将来を展望して、西条市民と学会会員の間で知見を共有し、また全国に発信していくことに決定しました。

次に、シンポジウムにおける報告の柱とその進め方について話し合い、お願いする報告者の選出を進めました。選出にあたっては、このプロジェクトに関わっている産業(住友化学)、官庁(西条市)、大学(愛媛大学)のいわゆる産・官・学を柱として、それぞれの角度から取り組みの現状と課題を明らかにしていただくことにしました。また座長は、学会より選出することにし、両角教授にお願いしました。こうしてシンポジウムの形が次第に整っていきました。またシンポジウムに先立って、テーマに深く関連した基調講演を設定し、演題を「産官学連携による地域興しの仕掛け方」として、東京農業大学食料環境経済学科の堀田教授に依頼しました。



東京農業大学食料環境経済学科  
堀田教授による基調講演

基調講演とシンポジウムの内容および評価については他の先生方をお願いすることにして、基調講演とシンポジウム、それに続くディスカッションは、実によくかみ合っていたと思います。特にディスカッションでは、青野市長自らが討論に加わっていただき、会場フロアからの質問に対しても、丁寧に説明していただいたのがとても印象的でした。

場所を移して夕方から行われた交流会では、JA関係者の手になる飲み物や郷土料理が整えられ、西条

の味覚を十分に堪能させていただきました。交流会には多くの方々に参加していただき、和やかな時間をともに過ごすことができました。

翌日は、第1部として、その前段では西条市における地域農業の取り組みについて、舘教授の司会のもとで、若手を中心とした5名の方々に日頃の活動状況を報告してもらいました。報告と討論を通じて、西条農業のかかえる諸課題や向かうべき方向が浮き彫りになりました。第1部の後段では、地元の丹原高校および西条農業高校の生徒さん達から熱のこもった研究成果を発表していただきました。西条の農業を対象とした研究成果の内容はよく準備されており、発表が終了するたびに大きな喝采を浴びました。最後に穂坂教授が高校生による研究成果発表の全体を総括しました。

第2部では、学会員による研究成果発表が2会場で10報告行われました。いずれの会場も報告と質疑応答が活発に展開され、実り多い発表になりました。

西条大会では、シンポジウムだけで750名前後にも達する方々に参加していただきました。西条市にかなりの広報をしていただいた結果であることはいうまでもありません。会場となった西条市丹原文化会館は優れた機能と設備を整えた立派な施設で、とても使いやすいところでした。

今大会がここまで盛り上がりを見せたのは、西条市側の用意周到な準備があったことに尽きます。青野市長自らが陣頭指揮をとり、西条市が一丸となって企画と実行に対しては全面的な協力をいただきました。また地元のJAや農業者の方々、西条市の市議会議員や自治会の方々、東京農業大学校友会愛媛県支部東予地区の方々などからも、惜しみない支援をいただきました。とりわけ開催に至るまでの間に、西条市側の直接の担当者であった杉森様とは、細かい点に至るまで相互に数限りなく連絡を取り続け、大会の準備にあたりました。杉森様の献身的なバックアップがなければ、ここまで成功裡に大会をなしえなかったと思います。杉森様には、この紙面をお借りして深く感謝申し上げます。

今回は、これまでになかった企画として、地元高校生による研究成果発表のコーナーを設けました。これも西条市の働きかけによるものですが、高校生に発表の場を設定して、そこから学ぶことも、実践総合農学として欠かせない要素と思いました。

ともかくも、地方大会は、開催地の受け入れ態勢とその準備に大きく依存しています。いつどこの地方大会でもそうなのですが、開催地のご努力によって開催に至り、またその過程で、地域農業について学ばせていただくとともに、大会の企画や運営の仕方についても、おおいに学ばせていただいております。次回の地方大会でもまた、さまざまに学ばせていただくことを楽しみにしています。

最後になりますが、西条大会の準備や開催当日におきまして、東京農業大学総合研究所のスタッフから大きな力をいただきました。記して感謝申し上げます。

## シンポジウム「産官学連携による農業を主体とした産地モデル化を考える」の座長を務めて一解題と総合討議の感想

東京農業大学総合研究所教授 両角 和夫



シンポジウムでの総合討議、座長を務める両角先生と産学官を代表する話題提供者の面々

今回の西条大会でのシンポジウムのテーマ「産官学連携による農業を主体とした産地モデル化を考える」は、私がいまだに関わってこなかった分野に関するもので、当初主催者から座長のお話をいただいたときはやや躊躇しました。しかし、西条市で取り組まれている非農業部門の企業の側から発意された産官学連携という、きわめて興味深い事例について議論することだったので、必ずしも適任ではないと思いつつお引き受けしました。

座長として、とくに議論してほしいと思いましたが、主に次の二点です。ひとつは、地元の企業がCSR（企業の社会的責任）の観点から農業振興に関わることが、地元の農業・農家の側にとってどのようなメリットをもたらすのか、もうひとつは、その一方で、農業・農家は、企業や社会にとってどのようなメリットを返すことができるのかということです。言ってみれば、地元企業と農業・農家は、果たしてWIN-WINの関係を構築することが可能か。また別な言い方をすれば、それぞれの側からいかにして地域社会の持続的な発展に貢献できるのかが問われるのではないかと思います。

今回の事例では、地元の企業は、その持つ技術・知識・情報あるいは経営管理システムや販売ノウハウを農業に提供して、農業の施設化・装置化の推進を図ることを目指しています。もとよりこのことは、そうした取り組みを行う農家の所得向上にはおおいに寄与すると思います。しかし同時に、そうした恩恵が一部の農家にとどまらず、今後の地域農業全体の維持・発展に貢献することが必要で、その道筋を明らかにすることが問われます。

一方、農業・農家の側は、まずは安心・安全の食料を安定的に地域社会へ供給することが必要です。しかし同時に、農村地域の各種資源、例えばバイオマス、水力、風力等を活用した再生可能エネルギーの生産と提供、あるいは悪化した地域の自然環境を修復し維持するこ

とも、企業を含む地域社会に対する貢献として期待されるはずです。

座長解題としての提起は、ほぼ以上のようなようです。報告の部では、市が企業を主体とした産官学の連携に取り組んだ背景、企業が市などと設立した第三セクター「サンライズファーム」の取組みの実態、これまでの市の産官学連携の評価等が報告されました。次の議論の部では、西条市長から産官学連携等に対する行政の長としての見解や意気込み、また第三セクターの玉置さんからは、企業の側からの産官学連携のむずかしさをうかがい知ることができました。そして愛媛大学の大隈教授からは、地域の現場における産官学の実態と問題を紹介され、農協など農業サイドの対応は不十分であるとの厳しい指摘もいただきました。いずれも今後の議論にとって貴重で有益な知見であると思われます。

## 第8回地方大会（西条大会）に参加して

東京農業大学短期大学部醸造学科教授 館 博



実践総合農学会の発起人には名前を連ねていましたが、幽霊会員で学会にはほとんど参加したことがありませんでした。短大が中心となって地域連携協定を締結した鮫川村での第6回地方大会の運営に協力したことと、大澤貫寿前学長から学部長は全員本学会の常任理事に任命されたことから、短大部長である当方も実践総合農学会に参加するようになりました。一昨年の第7回地方大会（安城大会）に引き続き、昨年の第8回地方大会（西条大会）にも参加しました。今回は、研究室の助手2人、

学生（醸造科学科4年生）2人およびパラグアイからのJICA研修生1人と一緒に西条大会に参加しました。

今まで、さほど愛媛県に行く機会がなかったことと、当方の教え子である国際バイオビジネス学科の木原高冶教授の故郷である西条市とはどのようなところかと期待して、西条大会に参加しました。また事前に板垣啓四郎事務局長（国際農業開発学科教授）から、西条市は四国のなかで最も農業が盛んな地域であること、今回の西条大会は市役所の全面的なバックアップで運営されているとの情報を得ていましたので、どのような地方大会になるのだろうと思って参加しました。大会当日の市長との昼食会に出席して、市長の農大に対する期待感が非常に大きいことに驚きました。大会初日は、市役所から市民に大会参加の動員がかかっていたようで、大会会場は750人も参加者で盛会でした。また交流会もJAの会議室に100人も人が出席していて驚きました。大会参加の経緯はともあれ、750人もの人達が大会に

参加したということは、実践総合農学会にとって大きな意味をもつと思えました。

大会2日目の朝、周ちゃん広場（JA直売所）を見学しました。当日は日曜日ということもあって、駐車場は満車で、店内は多くの客で混雑していました。安くて新鮮な野菜が買えるとのことで、地元だけではなく県外からも買いに来るとのことでした。さらに地元で採れた農産物だけではなく、惣菜、菓子、肉、魚なども販売していて、まるでスーパーマーケットのようでした。



座談会「地域農業の取り組み」を司会する館先生(左端)と西条農業を背負う方々

大会2日目の座談会（地域農業の取り組み）では当方が司会を担当しました。初めての経験なので上手にお役目を果たせたとはいえませんが、農大の先生方の協力で無事終わることができて安心しました。講演者の人選を当方が行ったわけではないので、座談会の意図があまり良くは理解できないところもありましたが、若手の農家の取り組みについて、その意気込みが紹介できたのではと思っています。昨年の夏に北海道のJA音更に行って聞いた年収3000万円の農業と四国の農業との違いを、頭の中で対比しながら座談会の話聞いていました。

本大会ではじめて地元農業高校の生徒による研究成果の発表が行われました。高校生の発表を聞いていて、発表した高校生にとってよい経験になったのはもちろんですが、地元の方々が高校生の研究内容について知る良い機会になったのではと思いました。いろいろな学会で高校生による研究発表を行っているように、本学会でも農業高校の生徒による研究発表を導入するべきと思いました。また、農業高校の先生方の研究発表の場も、あっても良いのではとも思いました。

今年度から、本学会の学術委員会委員長に就任したことから、実践総合農学会において当方の専門領域である食についての学会発表や論文の強化を図らなくてはと考えています。まずは自身の研究室において実践総合農学会での発表を目標にした研究テーマを設定し、次回の地方大会で発表できるようにしたいと思っています。そして多くの食の研究者達にもアピールして、実践総合農学会を盛り上げて行ければと考えています。

## 第8回地方大会（西条）の感想と自己紹介

東京農業大学醸造科学科 花角 綾美



東京農業大学醸造科学科に所属している花角綾美です。この度は、ニュースレターに紙面をいただきましたので、簡単な自己紹介と西条市との共催で行われた2013年度実践総合農学会第8回地方大会を聴講した感想を書かせていただこうと思います。

私は発酵食品に興味があり、大学で様々な勉強をしてきましたが、発酵食品の原料が畑で作られる過程などは勉強不足と感じていました。そのため農学研究者だけでなく、企業、農業生産者などのさまざまな分野の方々が参加し、価値観や知識を共有することができる実践総合農学会に強く興味をもち、参加させていただきました。

今回の学会は様々な発表項目があり、どれも興味深い内容でした。そのなかでも、実際に現場の方々のお話を聞くことができる地域農業の取り組みの座談会が非常に勉強になりました。特に私は、JA周桑直販所・周ちゃん広場店長一色さんのお話が印象的でした。学会でお話を聞く前に、実際に直販所を訪問させていただきました。そこで契約農家の方が出荷されている新鮮な野菜や魚介類や加工食品などの豊富さに驚きました。また、県内外から来た多くの方々が賑わっていて、地元にも愛されている直販所と感じました。そして座談会では直販所を常に発展させるためのさまざまな取り組みや周ちゃん新聞の作成、周ちゃんまるごと探検隊など、地元で愛されるためにさまざまな努力がなされていることを知りました。

また、学会全体を通して発表の際のプレゼンテーションの上手さの重要性をあらためて実感しました。今回聴講させていただいた講演は、どれも発表の仕方やスライドがわかりやすく非常に勉強になりました。要点を上手にまとめたうえで人に伝えるということを意識して、自分の卒業論文発表などに活かしたいと思います。

二日間でしたが、学生という身分のうちにこのような学会に参加する機会をいただくことができ、とても多くのことを学ばせていただきました。今後は、自身の専門性をもったうえで他の分野にも目を向け、さまざまなことに取り組める人になりたいと強く感じました。



## 第8回地方大会（西条）の感想と自己紹介

東京農業大学醸造科学科 茂木 研介



はじめまして。私は東京農業大学醸造科学科4年の茂木研介と申します。2013年11月23日～24日に西条市で開催された実践総合農学会第8回地方大会を聴講させていただきましたので、感想を報告させていただきます。

今回の学会では、基調講演、シンポジウム、パネルディスカッション、座談会、個別研究報告を通して、さまざまな角度から農業の流れ、変化について学ぶことができました。そのなかでも特に私が印象的に感じた内容は、個別研究報告の地元高校生による発表でした。現在の日本が抱える環境保全

に関する問題について高校生の視点から考え、実際に活動した報告でした。その内容は、「環境への付加が少ない循環社会の構築」、「地域から取り組む環境保全」を大きな目的とした報告でした。その発表は高校生とは思えないほど実験データが豊富であり、スライドもわかりやすくまとめられていました。また、発表に対する姿勢から地元への強い思いを感じました。

次に、座談会を通して実際に社会に出て仕事に取り組んでいる方々のお話を聞くことができました。さまざまな仕事に対する目標や考え方を聞くことができ、来年から社会に出る私には、非常に参考にさせていただくことの多い内容でした。

これまで四国には観光に訪れたことは何度かありましたが、この学会に参加して初めて、そこで行われている新農業の実態について知ることができました。また、学会発表の場では気がつきませんでした。懇親会の場で多くの方々と関わることで、農学研究者だけでなくその他のさまざまな職業の方々がこの学会に参加していたことに気づきました。私は普段大学では発酵食品について勉強していますが、実学主義を掲げる東京農業大学の学生として、専門分野にとらわれず多くの価値観や知識を取り入れることの重要性についてあらためて実感しました。

2日間という短い期間でしたが、非常に内容の濃い有意義な時間を過ごすことができました。今後もこのような機会をいただくことがあれば、積極的に参加し総合的に多くの知識を養うことで、物事を多面的に見極めることのできる者になりたいと感じました。

## 第8回地方大会（西条）の感想と自己紹介

パラグアイ共和国 JICA 日系研修員 竹内 香



今回初めて実践総合農学会地方大会に参加させていただき、たくさんの講演会を聞かせていただきました。また、地元で採れる農産物を有効に活用してつくられた地域の方々のアイデアあふれるさまざまな加工食品が並んだ直売所（周ちゃん広場）を見学させていただきました。このことから地域活性化に取り組まれている努力を知ることができました。西条市では、農家だけでなく主婦や学生の方々のひらめきやアイデア、そして地元企業もつ加工や製造技術、品質管理技術、営業知識、地域が一体となって取り組んでいる努力が、食材や製品の高い信頼に結びついて、地域の活性化を成功へと導くと思いました。

実家は農家ではありますが、“6次産業化”という言葉は初めてで、講演会当日西条市で目指されている6次産業化といった農業の意味がよく分からず理解できませんでした。6次産業化とは何かを、その後ネットで勉強させていただきました。

近年、高齢化と農業者の減少が進行しているといった問題が話題になっており、日本の農業が厳しい状況といわれる一方で、新規就農者がいるということも初めて知りました。TPPの問題もあるなか、日本農業の将来に確信がもてないのが現状とよく耳にします。こういった現状にあるなか、西条市でご活躍されている新規就農者の方々の発表にもありましたが、農家は農産物を生産するだけでなく、少しでも多くの方々に農業に興味をもってもらうため、観光農園での栽培に取り組み、農家自身で商品に付加価値を付けるなど、農業の魅力とおもしろさを強調し、伝え、広めていくための工夫をしていかなければならないと感じました。海外とは違って完璧さが要求される日本の農業を身近に見ることができました。

2日目の地元高校生の研究発表では、生徒さん達の元気で迫力ある声に驚き、鳥肌が立つほどすばらしい発表でした。特に今でも印象に残っているのは、夏の強い日差しを遮り室内温度の上昇を抑えられる竹すだれカーテンとグリーンカーテンの効果でした。これもまた、世界の話題になっている地球温暖化の問題にどう対応できるかの考えから、生徒さんたちの“自分達に出来ることから...”という思いが伝わってきました。

海外では聞く機会がなかった“春の七草”を知ることも出来ました。懇親会では、地元の食材が使われたお料理とアイデア溢れた美味しいデザートをごちそうになりました。

西条市でのこの2日間にわたる講演会では、大勢の方々の貴重なお話を聞くことができ、皆さんの市への強い思いを感じ取りました。皆が一体となって一つの目的に立ち向かっていけばこそ成功があるのだと感じました。西条市での2日間に見たこと、聞いたこと、感じたことを忘れずに、今後、就業する職務に取り入れていきたいと思っています。

\*\*\*\*\*

今年も多くの方々を会員にお迎えしました。よろしくお願ひします。

\*\*\*\*\*

平成 25 年度 実践総合農学会入会者リスト（順不同、敬称略）

氏名	所属	会員種別
久保田紀久枝	東京農業大学	正会員
真田 篤史	東京農業大学	正会員
豊田 裕道	東京農業大学	正会員
矢嶋 俊介	東京農業大学	正会員
鈴木 敏郎	東京農業大学	正会員
辻 聡	東京農業大学短期大学部	正会員
穂坂 賢	東京農業大学短期大学部	正会員
宮崎 毅	一般財団法人 日本水土総合研究所	正会員
吉田 岳志	公益社団法人農林水産・食品産業技術振興協会	正会員
中洞 正	農業生産法人(株)企業農業研究所 中洞牧場	正会員
佐々木昭博	福島県農業総合センター	正会員
中島 常雄		正会員
長谷川義洋	日本食育推進協議会	正会員
五味 剛史	合同会社適材適所	正会員
ユン ダカム	東京農業大学短期大学部	学生会員
阿部 文香	東京農業大学	学生会員
加藤 摩耶	東京農業大学短期大学部	学生会員
花岡 隆裕	東京農業大学	学生会員
花角 綾美	東京農業大学	学生会員
笠井 美希	東京農業大学	学生会員
鎌江慎太郎	東京農業大学	学生会員
菊地雄一郎	東京農業大学短期大学部	学生会員
金子 洋樹	東京農業大学	学生会員
金子 愛	東京農業大学	学生会員
金田 静流	東京農業大学短期大学部	学生会員
原沢 貴明	東京農業大学	学生会員
江口 慶祐	東京農業大学	学生会員
高橋 直矢	東京農業大学大学院	学生会員
高田 優美	東京農業大学	学生会員
山田 雅貴	東京農業大学	学生会員
似内 彬人	東京農業大学短期大学部	学生会員
小松 遊子	東京農業大学短期大学部	学生会員
小野 貴弘	東京農業大学短期大学部	学生会員
松尾 裕樹	東京農業大学	学生会員

氏名	所属	会員種別
上原 健	東京農業大学	学生会員
上原 雅貴	東京農業大学短期大学部	学生会員
上野 遥	東京農業大学	学生会員
森谷 智恵	東京農業大学	学生会員
清水 孝明	東京農業大学	学生会員
清水 萌花	東京農業大学短期大学部	学生会員
石垣 真俊	東京農業大学	学生会員
草野 榛作	東京農業大学短期大学部	学生会員
大崎 美緒	東京農業大学短期大学部	学生会員
大泉 智実	東京農業大学	学生会員
大谷 蘭丸	東京農業大学	学生会員
長嶋 麻美	東京農業大学	学生会員
辻 大河	東京農業大学	学生会員
田村 光	東京農業大学短期大学部	学生会員
等々力雪菜	東京農業大学短期大学部	学生会員
富田 悠	東京農業大学短期大学部	学生会員
末本 恵弥	東京農業大学短期大学部	学生会員
茂木 洋介	東京農業大学	学生会員
茂木 研介	東京農業大学	学生会員
野際 駿平	東京農業大学	学生会員
矢田 敦子	東京農業大学短期大学部	学生会員
有山 佳穂	東京農業大学	学生会員
和田 夏美	東京農業大学短期大学部	学生会員
蜷木 朋子	東京農業大学	学生会員
倉田 祐斗	東京農業大学大学院	学生会員
クワル エビン	東京農業大学大学院	学生会員
ツォントウイ ヴァン	東京農業大学大学院	学生会員
鈴木 基弘	東京農業大学	学生会員

## 実践総合農学会「ニュースレター第8号」

★編集責任者

実践総合農学会事務局長 板垣 啓四郎

★学会問い合わせ先

実践総合農学会事務局 栗原 ちとせ

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘 1-1-1 東京農業大学総合研究所内

TEL : 03-5477-2532 FAX : 03-5477-2634 E-mail : nri@nodai.ac.jp